

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820011

研究課題名（和文） 日中映画交流史に見る両国の相手国のイメージの変遷

研究課題名（英文） Changes in the mutual images of Japan and China in the history of the interaction of films between the two countries

研究代表者

劉文兵（RYU BUNPEI）

東京大学・大学院総合文化研究科 学術研究員

研究者番号：70609958

研究成果の概要（和文）：戦後の日中映画交流に携わった、日中の映画人へのインタビューに基づいた実証的な作業を行いつつ、日本映画が中国映画に与えた影響や、中国映画に現れた日本人のイメージなどについて考察してきた。本研究の研究成果を、著書の出版や、学術論文の執筆、学会発表をつうじて社会・国民に広く発信することができた。

研究成果の概要（英文）：While conducting empirical researches based on the results of interviews with Japanese and Chinese filmmakers who have been involved in the exchange of movies between Japan and China since the Second World War (August 1945), the author discussed the influences of Japanese films on Chinese ones and the image of Japanese people appearing in Chinese movies from a broad perspective. The results of this study have been disseminated to society and citizens through publications, academic papers, and presentations at academic conferences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,980,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：表象文化論

キーワード：日中映画交流史、日本人のイメージ

1. 研究開始当初の背景

従来の映画史研究においては巨匠が手がけた名作を軸に映画史を構築していく傾向が顕著であり、中国映画研究にかんじていえば、1980年代以来の張芸謀や陳凱歌といった

第五世代監督を対象とする研究が多く見受けられる（Ban Wang, "Illuminations from the Past: Trauma, Memory and History in Modern China, Stanford Univ. Pr., 2004 など）。そのため、中華人民共和国建国以来の

日中映画交流は、あくまでも政治的宣伝を目的としたものとして捉えられ、研究対象からはずされるか、ステレオタイプのなアプローチに止まる場合が多かった。また、日本においても、佐藤忠男著『キネマと砲声—日中映画前史』(リブロポー、1985年)や、拙著『映画のなかの上海—表象としての都市・女性・プロパガンダ』(慶應義塾大学出版会、2004年)、晏妮『戦中の日中映画交渉』(岩波書店、2010年)をはじめ、戦時中の日中映画交流に焦点を当てる研究が数多くなされてきたとはいえ、戦後、とりわけ中華人民共和国建国以降の日中映画交流史が研究対象に取り上げられることはほとんどなかった。近年、拙著『中国10億人の日本映画熱愛史』(集英社新書、2006)、四方田犬彦・晏妮編『ポスト満州映画論—日中映画往還』(人文書院、2010)、拙著『証言—日中映画人交流』(集英社新書、2011)といった新しい研究によって、戦後の日中映画交流は研究対象として徐々に認知されてきたが、日中映画交流と相手国イメージの構築との関連性という観点に欠けており、日中映画交流に携わった関係者へのインタビューをおこなうフィールド・ワーク的な作業がまだ十分におこなわれていない傾向は否めない。それゆえ、1949年以降の日中映画交流を、表象イメージの歴史的な分析と、関係者インタビューといった実証的アプローチの二つの観点から、体系的かつ重層的に検証することが急務である。

2. 研究の目的

本研究は、第二次世界大戦終焉以来の日中映画交流史の中で形成された、中国映画における日本人イメージと、日本映画における中国人イメージを、それぞれの時代の日中の「国民的」映画に即しながら、プロパガンダ、ジェンダー、身体、言語といった観点から表

象イメージの歴史分析をおこなうとともに、日中映画の人的交流が相手国のイメージの構築にまで深くかかわってきたという事実を、関係者へのインタビューや文献資料をつうじて検証した。

3. 研究の方法

本研究は、次の三つのプロセスをつうじて遂行された。(1) 日中両国が互いに抱く相手国のイメージの分析。(2) 戦後の日中映画交流史の実証的検証。(3) 現在の中国における日本映画受容の考察。

これによって、歴史的な記憶や、政治的・社会的状況によって影響されつづけてきた日中の相手国のイメージが、じつはそのかなりの部分が映像をつうじて形成され、また映像のかたちで流通しつづけてきているという事実、そして、このような映像イメージの背後に存在していた両国の豊かな映画交流、さらに今後の新たな異文化受容の可能性と他者の(受容)のあり方が段階的に明らかになった。

本研究の遂行にあたっては、国内の研究機関である東京大学、早稲田大学、映画専門大学院大学、専修大学のほか、北京大学、北京伝媒大学との国際的連携をおこなった。

4. 研究成果

(1) インタビューの作業。

本研究のもとで、日中映画交流に携わった映画人へのインタビューをおこなった。**日本側インタビュー対象者**：高倉健、佐藤純弥、山田太一、安倍徹郎ら計15名。**中国側インタビュー対象者**：於黛琴、管宗祥、段吉順、王好為ら計15名。

(2) 映像資料・文字資料の分析。50年代以来の日中映画交流について、北京大学図書館と北京首都図書館所蔵の映画雑誌や新聞

を手がかりに考察した。東映と満州映画協会との関係については、国会図書館、早稲田大学演劇博物館所蔵の資料を中心にリサーチをおこなった。さらに数百本の映像資料を網羅し、それらを分類しながら、分析をおこなった。

(3) 学術論文の執筆と研究発表。映画史的証言や、文字資料、映像資料に基づいて、①木下恵介監督と中国の謝晋監督との比較②新藤兼人監督が中国の「成人映画」というジャンルの確立に与えた影響③中国における松本清張作品を原作とした映画の受容④東映と満州映画協会との関係などの問題について、学術論文を執筆し、研究発表をおこなっていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

(1) 単著、劉文兵「相容れない二つのクリアリズム」——ミケランジェロ・アントニオーニと『革命様板劇』との出会い」、専修大学社会科学研究所『月報』2012 年9 月号、27 頁～34 頁、査読あり

(2) 単著、劉文兵「新藤兼人と中国映画界」、単著、『毎日新聞』夕刊「芸能欄」、2012 年6 月26 日、査読なし

(3) 単著、劉文兵「可変的なボーダー・ライン——中国の映画検閲の実態」、日本大学文理学部中国語学科『中国語中国文化』第9 号、139 頁～161頁、2012 年3 月、査読あり

(4) 単著、劉文兵「踊る青年の映画表象——ダンス・ブームと文化翻訳」、和光大学芸術学部『芸術学部紀要』第5 号、168 頁～183 頁、2012年3 月、査読あり

(5) 劉文兵×王成(中国清華大学教授)「海を渡った『砂の器』——中国における映画『砂の器』の影響」、北九州市松本清張記念館『松本清張研究第13 号』、2012 年3 月、136 頁～163 頁、査読なし

(6) 単著、劉文兵「文革終焉直後の中国における日本アニメのブーム」、一般社団法人日本動画協会『アニメ産業レポート 2011』、2011 年9 月、62 頁～63 頁、査読あり

(7) 単著、劉文兵「中国映画におけるグローバル化の軌跡」、京都大学地域研究総合情報センター『地域研究』13巻2号、2013年3月、48頁～64頁、査読あり

[学会発表] (計 5 件)

(1) 劉文兵「満州映画に見る中国人労働者の表象」、日本植民地研究会第20回全国研究大会・共通論題「帝国日本の熱狂・ホスピタリティ・アイロニー」、東京、2012年7月

(2) 劉文兵「日本映画人と中国の成人映画」、単独、現代中国学会主催「日中国交正常化40周年シンポジウム」、大阪、2012年6月

(3) 劉文兵「満州映画協会の＜啓民映画＞に見る同化戦略の表象」、日本植民地研究会、東京、2012年3月

(4) 劉文兵「二つの相容れないクリアリズム」の出会い——アントニオーニと「革命模範劇」、シンポジウム「映像としてのアジア——ミケランジェロ・アントニオーニ『中国』」、専修大学社会学研究所、東京、2012年12月

(5) 劉文兵「ダンス・ブームと文化翻訳」、表象文化論学会第六回研究発表集会、東京、

2011年11月 査読なし

〔図書〕（計 1 件）

単著、劉文兵『中国映画の熱狂的黄金期——
改革開放時代における大衆文化のうねり』、
岩波書店、1 頁～331頁、2012 年11 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

劉文兵 (RYU BUNPEI)
東京大学・大学院総合文化研究科 学術研
究員
研究者番号：70609958

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：